

## 動詞 *rob* の意味論\* —構文のメタファー的拡張と項の意味役割—

入学 直哉<sup>\*1</sup>

### The Semantics of the Verb *rob* —Metaphorical Extensions of the *rob* Construction and Semantic Roles of the Arguments—

Naoya NYUGAKU<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Organization for Fundamental Education

The verb *rob* entails that the robbed person is seriously negatively affected, which is the kernel sense of the verb. Therefore, the basic structure of the *rob* construction is, for example, ‘Jesse robbed the rich of a million dollars’. From this basic structure, sentences like ‘He robbed me of my childhood’ or ‘Technical problems apparently robbed the project of success’ are derived as a result of metaphorical extensions. In the latter sentence, the kernel sense of the verb must be completely lost. It is well-known that *rob* is not an alternate verb, that is to say, ‘\*Jesse robbed a million dollars from the rich’ is ungrammatical. In COCA, however, we can find some examples of the ‘NP<sub>SUB</sub> *rob* NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’ construction, such as ‘The popular highprotein diets rob calcium from bones’. This construction focuses on ‘a transfer of things’, so that in the construction the verb takes ‘Mover’ as the direct object and the preposition *from* instead of *of* is selected to explicitly show the starting point of the transfer.

**Key Words** : the verb *rob*, metaphorical extensions, semantic roles, locative alternation, P-transitive relation

## 1. 緒 言

動詞 *rob* はその統語形式と意味において、しばしば類義語である *steal* と対比して論じられる (Goldberg 1995, 上野 1995 など). 本稿ではこれまでほとんど指摘されることのなかった *rob* に関する現象についてコーパスによるデータを基に意味論的に考察する. まず 2 節において先行研究を踏まえて *rob* の中核義を確認する. 3 節では中核義を基盤とする基本構文からの構文のメタファー的拡張について論じる. さらに 4 節においては従来所格交替しないとされてきた *rob* が所格交替する現象, 即ち, ‘NP<sub>SUB</sub> *rob* NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’ 構文が存在することを指摘し, この構文の存在理由について妥当な説明を試みる.

## 2. 動詞 *rob* の中核義

奪取動詞の代表格の一つである *rob* は類義語 *steal* との比較において, その統語的及び意味的特徴を論じられることがある. 両動詞は統語的に以下のような振る舞いの違いがある.

- (1) a. Jesse robbed the rich (of all their money).  
b. \*Jesse robbed a million dollars (from the rich).
- (2) a. Jesse stole money (from the rich).  
b. \*Jesse stole the rich (of money).

(Goldberg 1995:45)

\* 原稿受付 2020 年 5 月 29 日

<sup>\*1</sup> 基盤教育機構

E-mail: nyny@fukui-ut.ac.jp

(1a)のように rob は直接目的語の位置に「被奪取者」を取り、前置詞 of の目的語に「被奪取物」を取る場合は正文であるが、(1b)のように直接目的語として「被奪取物」を取った場合は非文となる。反対に steal は(2a)のように「被奪取物」を直接目的語に取り、「被奪取者」を from 句で標示するのが正しく、直接目的語に「被奪取者」を取る(2b)は非文である。また(1)-(2)に示す通り、いずれの文からも前置詞句を削除した場合でもこの文法判定は同じ結果となる。即ち、rob は「被奪取者」に焦点が置かれるのに対し、steal では「被奪取物」に焦点が置かれることになる。これは言い換えれば、rob ではその行為の影響を受けるのは「被奪取者」であり、steal では「被奪取物」が行為の影響を受けるということである。Goldberg(1995:45)は rob と steal の意味の相違を各々の動詞が持つ参与者役割のプロファイルの違いから分析している。即ち、rob も steal も <thief target goods> の 3 つの参与者役割を持つが、rob では thief と target がプロファイルされるのに対し、steal では thief と goods がプロファイルされるとする。

- (3) rob <thief target goods>  
steal <thief target goods>

では rob の直接目的語の被奪取者が「行為の影響を受ける」ということはどのようなことであろうか。これに関して上野(1995)は以下のような副詞との共起関係を示し、rob は「脅迫的」「威嚇的」「暴力的」などの意味の副詞とのみ共起できることから、「被害者が犯人によって銃などの武器で脅迫または暴力を加えられることで、心理的に深い影響を被ること」を意味するとする。

- (4) The James gang robbed the bank of a lot of money
- |   |  |   |   |
|---|--|---|---|
| { | *silently<br>*secretly<br>*slyly<br>*unthreateningly<br>threateningly<br>violently | } | . |
|---|--|---|---|

ただし、(5)のように副詞句により脅迫や暴力を伴わないことが明示されたとしても、動作主が Jesse James のような銀行強盗として悪名高い人物の場合は、被害者が脅迫感や恐怖感を持ち、現金が奪われることは十分に考えられると指摘している。

- (5) Jesse James robbed the bank of a lot of money without threats / violence.

即ち、threateningly や violently などの副詞句が明示されない(1a)のような文においては、動作主による脅迫の有無に関わらず、被害者が心理的に影響を被っているという解釈が成立することになる。

rob の直接目的語の位置に生起する被害者名詞には「人物」だけでなく、(5)で示したような「場所」を表す名詞句も生起可能である。但し、上述した通り、rob は「被害者が心理的に深い影響を被る」ことを含意するので、この場合の場所名詞句はその背後に人物の存在を暗示するものでなければならない。(5)の場合は、the bank の背後には「銀行員」という人物の存在があるため、何ら問題なく正文となる。このことは、たとえ背後に人物の存在が暗示される場所名詞句であっても、(6a)のようにその場所に人物が不在であることが明示された場合に rob が用いられないことから明らかである。

- (6) a. \*Our house was robbed while we were away.  
b. Our house was burglarized while we were away. (cf. NOAD s.v. rob)

当然、明らかに人物の存在が背後に暗示されない場所名詞句は rob の直接目的語にはなれない。

(7) \*He robbed the safe of its contents.

(Goldberg 1995:48)

(3)に示した通り、類義語 steal は target をプロファイルしないので、このような場所名詞句に関する意味的制約は受けない。よって、以下の(8)は正文となる。

(8) He stole money from the safe.

(Goldberg 1995:48)

直接目的語の指示物は動作主からの影響により脅迫感や恐怖感などの「心理的に深い影響を被る」ということを述べたが、これは被奪取物の観点からも観察される。被奪取物名詞の指示物は、それが被害者から奪われた場合に、やはり被害者が「心理的に深い影響を被る」ものでなければならない。従って、(9)は1ペニーを奪われただけでは被害者は心理的に深い影響を被るとは言えないため非文と判定される。

(9) \*I robbed him of a penny.

(Goldberg 1995:46)

ところが(10)のように奪われたものが1ペニーであってもそれが被害者にとって最後の所持金であれば、被害者はその最後の1ペニーを奪われることにより所持金をすべて失ってしまうという大きな影響を受けるため容認度が上がる。

(10) I robbed him of his last penny.

(Goldberg 1995:46)

(9)-(10)で見たような被奪取物に関わる意味的制約も(8)と同様に steal には適用されない。(11)はまったく問題なく容認される。

(11) I stole a penny from him.

以上から動詞 rob の中核義は(12)としてまとめることができる。

(12) 動作主が脅迫等の行為により、あるいは被害者にとって貴重な所有物を奪うことにより、被害者に深刻なマイナスの心理的影響を与える。

### 3. 構文のメタファー的拡張

語彙の意味変化の要因の一つにメタファーに基づく意味拡張がある。例えば、(13)において前置詞 in は各々「物理的空間」(=13a), 「社会的空間」(=13b), 「感情的空間」(=13c)を意味し、(13a)から(13c)へとメタファーの意味拡張を起こしている。

(13) a. Harry is in the kitchen. <物理的>

b. Harry is in the Elks.



c. Harry is in love. <抽象的>

(cf. Lakoff and Johnson 1980:59)

このようなメタファーを基盤とする意味の拡張現象は語彙レベルだけではなく、構文レベルにおいても観察される。(14a)-(14c)は動詞 hit のメタファー的意味拡張の例である。

(14) a. The policeman hit the man very hard.

b. Our area was hit worst by the storm.

c. The film industry has been hard hit by the economic depression.

(cf. 山梨 2009:112)

動詞 hit は(14a)のように主語の動作主と目的語の被動作主に有生名詞を取るのが基本である。(14b)では自然現象という物理的事象を表してはいるものの、主語の動作主と目的語の被動作主は共に無生名詞である。さらに(14c)においては主語と目的語は無生名詞であり、表す事態も経済現象という抽象的な事象である。よって、(14)の hit 構文は基本構文である(14a)から派生構文である(14b)を経て、さらに(14c)へと構文の拡張が生じている。このような構文におけるメタファー的意味拡張は以下のような図式で示される。

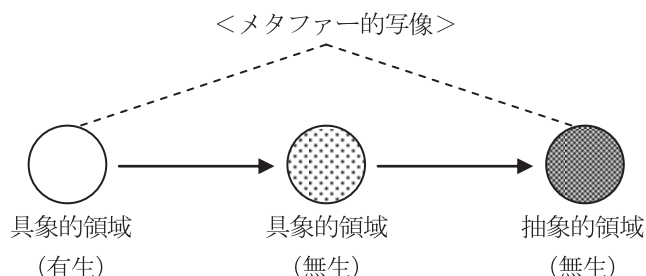


Fig. 1 メタファーによる拡張 (cf. 山梨 2009:113)

rob においても(14)で例示したようなメタファーを基盤とする意味的拡張の用例が確認される。以下の例を見てみよう。

- (15) a. They threatened to shoot him and robbed him of all his possessions. (LDOCE s.v. rob)  
 b. Jesse James robbed the bank of a lot of money. (上野 1995:44)
- (16) a. He robbed me of my childhood. (BNC)  
 b. The illness robbed him of a normal childhood. (LDOCE s.v. rob)
- (17) a. ...but there was a new stress on its ability to rob adolescence of real fulfillment (BNC)  
 b. Technical problems apparently robbed the project of success. (BNC).

(15a)は「動作主が被動作主を脅迫し、被動作主の所持品を奪う」という事態を表している。(15b)は被動作主として背後に人物の存在を暗示する場所名詞句が置かれている例である。両例文において rob は 2 節で確認した中核義を保持している。従って、(15a)-(15b)は rob の基本構文であると言える。(16a)は主語の動作主と直接目的語の被動作主はいずれも有生名詞であるが、前置詞 of の目的語である被奪取物には無生名詞が現れている。さらに(16b)は主語の動作主も無生名詞である。(16a)-(16b)においては直接目的語の指示物が「動作主からの脅迫や暴力により心理的に深い影響を受けた」という意味は読み取れない。但し、「子ども時代」という被動作主にとって貴重なものを奪われたという点においては、被動作主は「深刻なマイナスの心理的影響を受けている」と言える。(17a)-(17b)は主語、直接目的語、前置詞目的語のすべての項に無生名詞が生じており、rob の中核義である「動作主が脅迫等の行為により、あるいは被害者にとって貴重な所有物を奪うことにより、被害者に深刻なマイナスの心理的影響を与える」という意味を読み取ることは不可能である。

(15)-(17)における rob 構文を各文法項に生じる名詞句の性質に基づいてそれぞれ以下のような Type A から Type C に分類する。

- (18) Type A: NP<sub>SUB</sub> (有生) rob NP<sub>OBJ</sub> (有生) of NP<sub>OBL</sub> (お金・貴重品等の具象物)  
 Type B: NP<sub>SUB</sub> (有生/無生) rob NP<sub>OBJ</sub> (有生) of NP<sub>OBL</sub> (能力・特質・価値等の抽象物)<sup>1</sup>  
 Type C: NP<sub>SUB</sub> (有生/無生) rob NP<sub>OBJ</sub> (無生) of NP<sub>OBL</sub> (能力・特質・価値等の抽象物)

rob 構文は Fig. 2 のように基本構文の Type A から Type B を経て Type C へとメタファー的拡張を起こしていると考えられる。

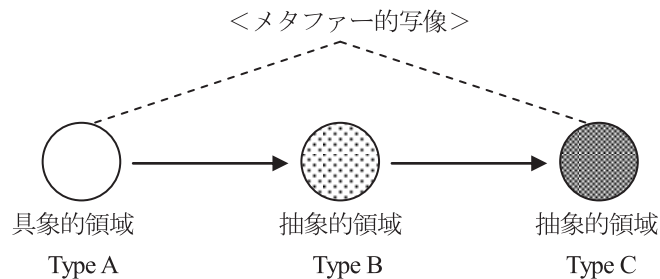


Fig. 2 rob 構文のメタファー的拡張

また、各々のタイプにおける被動作主名詞の指示物が被る心理的影響の有無は以下のようにまとめることができる。

Table 1 被動作主に対する心理的影響

	動作主からの脅迫等による心理的影響	物理的/抽象的な所有物を奪われることによる心理的影響
Type A	有	有
Type B	無	有
Type C	無	無

BNC を用いて rob 構文の用例を収集し、上述の Type A～Type C に分類した。それぞれの Type の用例数と割合を以下に示す。<sup>2</sup>

Table 2 BNC における rob 構文の用例数

	能動(A)	受動(B)	(A) + (B)	割合(%)
Type A	18	26	44	16.5
Type B	117	54	171	64.3
Type C	30	21	51	19.2

Table 2 が示す通り、rob 構文の使用頻度が最も高いのは Type B である。つまり動詞 rob は「動作主/動因が被動作主から能力/特質/価値などの抽象的所有物を奪う」という意味で用いられる場合が最も多いということである。それに対して、当該構文の基本構文である Type A の用例数は最も少ない。1 節で述べたように rob は類義語 steal との統語的・意味的な対比において論じられることが多く、それゆえ(12)に示した「動作主が脅迫等の行為により、あるいは被害者にとって貴重な所有物を奪うことにより、被害者に深刻なマイナスの心理的影響を与える」という中核義が強調される傾向にあるが、実際の使用状況は中核義用法が最も頻度が低い。これに関しては、山梨(2009:114)も基本構文の使用頻度が最も高く、派生構文が特殊な用法のために使用頻度が低いとは限らないと述べ、どのタイプの構文がどの程度の頻度で使用されるかを明らかにするためには、実際の言語使用のデータを綿密に調べる必要があると指摘している。

Type A は Type B、Type C と比較すると受動用法の用例数が能動用法の用例数を上回っている。<sup>3</sup> Type A においては、動詞の目的語の指示物は行為遂行の過程においても、行為の結果状態においても影響を被ることから、強い被動作主性を持つと言える。そのためトピック性は高くなり、結果として統語的にトピックの位置を占める主語位置に生起する割合が高くなると考えられる。他方、Type B と Type C における目的語指示物の被動作主性は Type A のそれと比較すると相対的に弱いと言える。特に Type C における目的語指示物はもはや Patient の意味役割を持っているかは疑問である。

#### 4. rob と所格交替現象

2節で示したように, rob は所格交替をしない。直接目的語の位置に被奪取物が生起し, 被奪取者が前置詞 from で標示される(19b)は非文である。

- (19) a. Jesse robbed the rich of a million dollars.  
b. \*Jesse robbed a million dollars from the rich.

ところがコーパスを調査すると以下のような例が確認される。用例はすべて COCA による。

- (20) a. This arrangement ensures that taller plants do not rob sunshine from shorter plants, ...  
b. ... it's wise to pick these blossoms off rather than let new fruit form and rob energy from the existing crop.  
c. Be aware that as organic mulches break down, they take some nitrogen from the soil, robbing nutrients from vegetables.  
d. The popular highprotein diets rob calcium from bones and strain your kidneys.  
e. Uncontrolled, water-hyacinth robs water from potential drinking and irrigation supplies.  
f. What's interesting is the way the big bump in horsepower doesn't come at the expense of higher rpm and doesn't rob acceleration from lower rpm.

これらの例を分析する手掛かりとして, まず所格交替動詞の代表である spray/load について見てみよう。

- (21) a. Jessica sprayed paint on the wall.  
b. Jessica sprayed the wall with paint.  
(22) a. Jessica loaded boxes on the wagon.  
b. Jessica loaded the wagon with boxes.

(Levin 1993:118)

(21)-(22)のような所格交替現象は従来「全体的解釈/部分的解釈(“holistic/partitive” effect)」の観点から議論されることが多い(Levin 1993:50-51)。即ち, 場所名詞句が動詞の目的語となっている(21b)と(22b)では, それぞれ「壁全体にペンキが吹き付けられた」「トラックの荷台全体に箱が積まれた」という全体読みとなり, 移動物名詞句が動詞の目的語となっている(21a)と(22a)では, それぞれ「壁の一部にペンキが吹き付けられた」「トラックの荷台の一部に箱が積まれた」という部分読みが生じる。しかし, 谷口(2005:68-70)は(21)-(22)が表す内容は「モノの移動」と「場所の状態変化」という二つの事態で捉えることができる典型的な他動関係(Prototypical transitive relation : P-transitive relation)であるとし, 以下のような事態認知モデルを提示している。

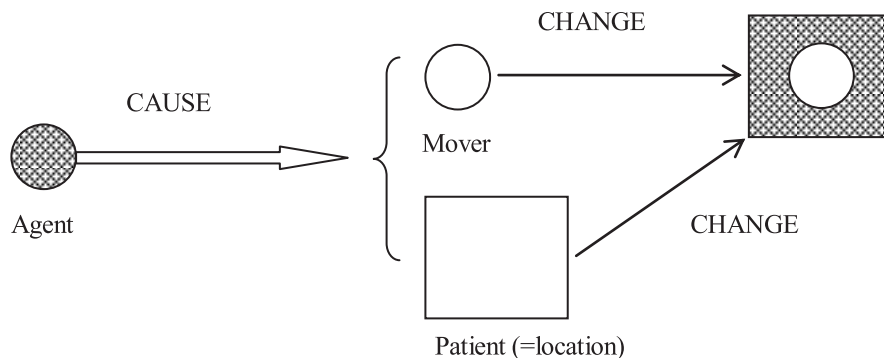


Fig. 3 spray/load 交替の事態認知モデル (谷口 2005:69)

(21)は Jessica がペンキを吹き付けることによりペンキが壁に向かって移動するという「ペンキの移動」とペンキ



が吹き付けられることにより場所である壁の色が変化するというような「壁の状態変化」を表しており、(22)は Jessica が箱をトラックの荷台に積み込むという「箱の移動」と箱が荷台に積み込まれることにより場所である荷台が箱によって占められるという「荷台の状態変化」と捉えられることになる。(21a)と(22a)のような移動物(=Mover)を焦点化する解釈では、Mover が主語に次いで認知的際立ちを得るため NP<sub>OBJ</sub> となり、場所(=Location)は際立ちを与えられないため斜格要素の NP<sub>OBL</sub> として前置詞によって標示される。反対に(21b)と(22b)のように場所を焦点化する解釈では Location が認知的際立ちを与えられるため NP<sub>OBJ</sub> となり、Mover は背景化され NP<sub>OBL</sub> となる。

以上のような分析では例えば(21)の各項は(23)に示すような意味役割を持っていると見なされる。<sup>4</sup>

(23) a. Jessica sprayed paint on the wall.

Agent            Mover    Location

b. Jessica sprayed the wall with paint.

Agent            Location    Mover

谷口は spray や load のような「覆う(covering)」「置く(putting)」を意味する動詞とは反対の「除去」を意味する clear などの動詞の所格交替においても上述のような「モノの移動」と「場所の状態変化」という考え方が適用できると主張する。

(24) a. Henry cleared dishes from the table.

Agent            Mover            Location

b. Henry cleared the table of dishes.

Agent            Location    Mover

(cf. Levin 1993:52)

(24a)は Mover である「皿の移動」に焦点が置かれており、Location である「テーブルの状態変化」に関してはトピック性は低い。他方、(24b)は Location が動詞目的語のため「皿が取り除かれた結果、テーブルがきれいになった」という「場所の状態変化」が焦点となっている。

Levin(1993)は rob を clear タイプの動詞として分類している。従って、谷口の分析を援用するならば rob 構文も(24b)と同様の事態として捉えることができる。

(25) Jesse robbed the rich of a million dollars.

Agent            Location            Mover

(25)が表す事態は Location である金持ちから Mover である「百万ドルが移動」することにより、その金持ちは「百万ドルを失うという状態変化」を被ることを表していると言える。

このように被動作主から所有物を奪うという行為を「モノの移動」という概念で捉える考えは上野(1995)においても提案されている。上野は Gruber の提唱する主題関係の考えに基づき rob の意味を考察している。(26)を見てみよう。

(26) a. John walked from the park to his house.

b. Bill converted from a Republican to a Democrat.

(26a)-(26b)では出発点標示前置詞 from と到達点標示前置詞 to が現れており、(26a)は「公園から家まで」の物理的移動が表され、(26b)では「主義の変化」という抽象的な移動が表されている。

Gruber は(27)-(28)においては本の物理的移動と同時に所有権の移動という抽象的な移動が示されており、移動の到達点標示前置詞 to がある以上、そこには出発点標示前置詞 from が前提として存在しなければならないことから、give と sell には from が編入されていると主張する。

(27) John gave a book to Mary.

(28) John sold a book to Mary.

上野はこの Gruber の主張に基づき(29)は大金の強奪行為の結果として現金の所有が銀行から Jesse James へと移動するという事態が生じていることから, (27)-(28)の give や sell と同様に rob にも from が編入されていると考えるべきであると述べている.<sup>5</sup>

(29) Jesse James robbed the bank of a lot of money.

以上のような谷口(2005), 上野(1995)の考察を基に‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’構文について考えてみたいと思う。(20)に示したこのタイプの構文の例を(18)に示した分類に倣い, (30)のように分けることとする。

(30) Type A’: NP<sub>SUB</sub> (有生)                      rob   NP<sub>OBJ</sub> (お金・貴重品等の具象物)                      from   NP<sub>OBL</sub> (有生)

          Type B’: NP<sub>SUB</sub> (有生/無生)                      rob   NP<sub>OBJ</sub> (能力・特質・価値等の抽象物)                      from   NP<sub>OBL</sub> (有生)

          Type C’: NP<sub>SUB</sub> (有生/無生)                      rob   NP<sub>OBJ</sub> (能力・特質・価値等の抽象物)                      from   NP<sub>OBL</sub> (無生)

(30)の Type A’, Type B’, Type C’はそれぞれ(18)の Type A, Type B, Type C に対応している。これらの相違は Type A~Type C では NP<sub>OBJ</sub> の位置に被奪取者が現れ, NP<sub>OBL</sub> に被奪取物が置かれるのに対し, Type A’~Type C’では NP<sub>OBJ</sub> に被奪取物, NP<sub>OBL</sub> に被奪取者が生起し, 前置詞が of ではなく from に代わっている点である。つまり, Type A’~Type C’は rob が steal 型の構文を取っているということである。COCA から収集した用例を Type A’~Type C’に分類した結果を以下に示す。<sup>6</sup>

Table 3 COCA における‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’の例

	用例数	割合(%)
Type A’	4	12.9
Type B’	5	16.1
Type C’	22	71.0

Table 3 から明らかなように, このタイプに生じるのは Type C’が圧倒的に多いことが分かる。2 節で述べた通り, rob の中核義は「動作主が脅迫等の行為により, あるいは被害者にとって貴重な所有物を奪うことにより, 被害者に深刻なマイナスの心理的影響を与える」であるから, 基本構文である Type A では NP<sub>OBJ</sub> として人物もしくは背後に人物の存在を暗示させる名詞句が置かれる。また基本構文からのメタファー的拡張構文である Type B も「被害者にとって貴重な所有物を奪うことにより, 被害者に深刻なマイナスの心理的影響を与える」ことを意味するのでやはり NP<sub>OBJ</sub> には有生名詞が現れる。従って, Type A と Type B においては NP<sub>OBJ</sub> の名詞句は強い被動作主性を持つと言える。

(31) They threatened to shoot him and robbed him of all his possessions. (=15a)

(LDOCE s.v. rob)

Agent    Patient                      Theme

(32) He robbed me of my childhood. (=16a)

(BNC)

Agent      Patient      Theme

しかしながら, Type C においては NP<sub>OBJ</sub> の指示物は無生名詞であるため「深刻なマイナスの心理的影響を被る」という解釈は読み取れない。それ故, Type C における rob は完全にその中核義を失い, 「抽象的事物から抽象的事物を奪い去る」という「モノの移動」に焦点が当てられているのではないかと考えられる。よって, Type C にお



ける NP<sub>Obj</sub> の意味役割は Patient ではなく、谷口(2005)が分析するように Location, もっと正確に言えば Mover の起点となる Source が与えられるべきではないと思われる.<sup>7</sup>

- (33) Technical problems apparently robbed the project of success. (= (17b)) (BNC)
- Agent                      Source              Mover

(33)が「モノの移動」、この場合は **success** という抽象的事象の移動を表しているとする、Source である **the project** が移動の起点であることを明示する方が理解しやすい。そこで登場するのが出発点標示前置詞の **from** であり、steal 型の '**NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>ORI</sub>**' 構文である。

- (34) The popular highprotein diets rob calcium from bones and strain your kidneys. (=20d) (COCA)
- |       |       |        |
|-------|-------|--------|
| Agent | Mover | Source |
|-------|-------|--------|

これにより Table 3 に示したように ‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’ 構文において Type C’ の用例が圧倒的に多い理由が明らかとなる。(33) のように rob の中核義を消失し、「モノの移動」に焦点が置かれる事態認知が行われる場合には、NP<sub>OBJ</sub> に Location もしくは Source が生起する ‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> of NP<sub>OBL</sub>’ 構文ではなく、Mover を NP<sub>OBJ</sub> に要求する ‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’ 構文の方が英語母語話者にとっても直観的に受け入れられ易いのではないかと考えられる。

## 5. 結 論

本研究では、コーパスに基づく用例から **rob** 構文がメタファー的拡張を起こしていることを確認し、実際の言語使用の場では基本構文よりも派生構文の使用頻度の方が高いことを指摘した。また派生の最終段階として、‘Technical problems apparently robbed the project of success’のような目的語に有生名詞が生じない例が存在する事実を明らかにした。さらに4節では所格交替を起こさないとされる **rob** が所格交替を起こしている例、つまり‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’構文の存在を指摘した。そして **rob** がその中核義を完全に喪失した文では「モノの移動」に焦点が置かれるため、NP<sub>OBJ</sub> に Mover が生起し、その Mover の出発点を明示的に標示するために前置詞 **from** を顕在化させた‘NP<sub>SUB</sub> rob NP<sub>OBJ</sub> from NP<sub>OBL</sub>’構文が選好されると結論付けた。

注

1. 以下のように NP<sub>OBL</sub> に有生名詞が現れる場合であっても、それが被動作主にとって抽象的に価値のある存在と解釈される場合は Type B として分類する.
  - (i) His brave words echoed around the world after the IRA's bomb in Enniskillen robbed him of his beloved daughter.
2. データを抽出したジャンルは MAGAZINE, NEWSPAPER, NON-ACAD, ACADEMIC, MISC である.
3. 能動, 受動には以下のように動名詞として現れている例や不定詞, 形容詞的分詞として用いられている例も含まれる.
  - (i) Elsewhere, three girls aged 15 and 16 years were brought to court for robbing a woman of 9s 2d after they had hustled her.
  - (ii) The 32-year-old man was shot in the stomach after being robbed of just 26p.
4. (23b)の paint の意味役割は Instrument とするのが本来は妥当であると考えますが, ここでは「モノの移動」と「場所の状態変化」という事態認知の観点から議論を行っているので, Mover として標示することとする.
5. (29)の主語名詞である Jesse James は移動物の到達点と考えれば, Agent ではなく Goal と見なすこともできる.
6. データを抽出したジャンルは MAGAZINE, NEWSPAPER, ACADEMIC である. なお, from の補語に動名詞が生じる例は除外した.
7. いわゆる主題基準は「文中の各々の文法項(argument)は, 1つの, そしてただ1つの主題役を有し, 各々の主題役は, 1つの, そしてただ1つの文法項に付与される」と規定される(荒木・安井 1992:1496)が, 長谷川(1982)は1つの文法

項が複数の主題役、即ち、意味役割を担う解釈が可能であることを指摘している。

- (i) John traded his bike to Mary for her dog. (ジョンはメアリーに自転車をやり、代わりに彼女の犬をもらった)  
(i)では Theme<sub>1</sub>(his bike)に関しては, John が Agent<sub>1</sub> かつ Source<sub>1</sub> で Mary が Goal<sub>1</sub> であるが, Theme<sub>2</sub>(her dog)に関しては, John が Goal<sub>2</sub> で Mary が Source<sub>2</sub> となることから, John は 3 つの意味役割を持つことになる。

### 参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.  
荒木一雄・安井稔 (1992) 『現代英文法辞典』 三省堂, 東京.  
Goldberg, A. E. (1995) *Constructions : A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.  
長谷川欣佑 (1982) 「英文法の枠組」『言語』第 11 巻 12 号, pp.28-34.  
Hornby, A. S. (2010) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 8th edition, Oxford University Press, Oxford.  
Jewell, E. et al (eds.) (2005) *The New Oxford American Dictionary* (=NOAD), 2nd edition, Oxford University Press, New York.  
小西友七・南出康世 (編) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 大修館書店, 東京.  
Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, Chicago.  
Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.  
入学直哉 (2019) 「動詞 rob の補部構造に関する通時的考察」『福井工業大学研究紀要』第 49 号, pp. 208-215.  
Pearson Longman (2009) *Longman Dictionary of Contemporary English* (=LDOCE), 5th edition, Pearson Education, Harlow.  
Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition : The Acquisition of Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge.  
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.  
谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房, 東京.  
*The British National Corpus* (=BNC)  
*The Corpus of Contemporary American English* (=COCA)  
上野義和 (1995) 「英語の論理：その教え方と学び方」『大阪外大英米研究』第 20 号, pp. 15-55.  
山梨正明 (2009) 『認知構文論』 大修館書店, 東京.

(2020 年 9 月 10 日受理)